

令和５年度 第１回「京都市地域コミュニティ活性化推進審議会」摘録

日 時	令和５年７月２６日（水）午後６時～午後７時４０分
場 所	京都市役所分庁舎地下１階 区長会室
出席委員	１３名（志藤会長、前田副会長、石本委員、宇野委員、尾崎委員、城戸委員、杉原委員、長谷川委員、村上委員、山口委員、山本委員） ※ゲストスピーカー：京都景観フォーラム専務理事 森川宏剛氏
欠席委員	黒田委員、山口委員
傍 聴 者	１名
事 務 局	地域自治推進室：長谷川、平井、松浦、小林、中野 総合企画局総合政策室市民協働推進担当：荻原
議事次第	１ 開会 ２ 議題「多様な地域の特性に即した地域活動の推進（基本指針２）」 （１）事務局からの説明 （２）沖委員からの発表 （３）森本委員からの発表 （４）森川氏からの発表 （５）質疑応答等 ３ 閉会
会議資料	資料１ 委員名簿 資料２ 座席表 資料３ 多様な地域の特性に即した地域活動の推進【事務局発表】 資料４ コミュニティ活性化推進審議会報告要旨【沖委員発表】 資料５ 地域団体の維持・継続に向けて～消防団の運営について～ 【森本委員発表】 資料６ 景観まちづくり 価値共有によるコミュニティ再生の試み 【森川氏発表】

【議事内容】議題「多様な地域の特性に即した地域活動の推進」

（１）事務局からの説明

＜事務局＞

資料３「多様な地域の特性に即した地域活動の推進」に沿って説明。

（２）沖委員からの発表

＜沖委員＞

資料４「コミュニティ活性化推進審議会報告要旨」に沿って発表

(3) 森本委員からの発表

＜森本委員＞

資料5 「地域団体の維持・継続に向けて～消防団の運営について～」に沿って発表

(4) 森川氏からの発表

＜森川氏＞

資料6 「景観まちづくり 価値共有によるコミュニティ再生の試み」に沿って発表

(5) 質疑応答等

＜志藤会長＞

「多様な地域の特性に即した地域活動の推進」という議題で、3名の方に御報告いただいたが、質問・意見あれば御自由に出していただければと思う。

まず、森本委員に分団長に就任した経緯について伺いたい。

＜森本委員＞

20代で、分団長を経験できることはまずないし、分団員の皆さんが許してくれるなら、助けていただけるなら、やらせてほしいと声を上げた。

実際、30～50代の働き盛りの世代だと、平日夜も休みの日も活動があり、役を担うのは難しいところがあると思う。その点自分は、ある程度時間の融通が利く仕事なので、できているところがある。

＜志藤会長＞

引き受けた際、他の分団員の反応はどうだったか。

＜森本委員＞

その当時は自分より上の世代の方々ばかりだったが、よくやってくれた、なんでもやるから言って、と温かく迎え入れてくれた。

＜尾崎委員＞

女性の分団員は何名いるのか。

＜森本委員＞

自分を含めて2名。以前は大学の防災サークルから学生が加入してくれており、女性も

もう少しいたが、サークルがなくなり、入団する学生も減ってしまった。今いるもう一人の女性は大学を卒業してからも続けてくれている。女性分団員ももう少し増やしていきたい。

<志藤会長>

他に誰か、御意見はあるか。

<玉村委員>

3名の発表を聞き思ったのが、共同体としての意識を次の世代に教育の中でどう伝えていくか、広めて深めていくのか、という点である。戦後の教育では「個」の権利が非常にクローズアップされており、自分さえよければよい、自分は一人で生きていけるんだという誤解を生んでいるように思う。本当に幸せに暮らすためには、「個」も尊重されつつ、集団の中に自分があり、集団の中で幸せになっていくんだという両方を学ぶことが大切である。今の子どもたちが学校教育の中で、地域コミュニティに参加することが実は個を尊重することであり、それが文化をはぐくみ、自分の地域に誇りを持つことにつながるんだということを教わる機会を持つことが大切だと考えている。

そのようなことを思いながら発表を聞いていたが、森本委員に、18歳で消防団に入ろうと思ったマインドセットはどこにあったのか、是非お聞かせいただきたい。

<森本委員>

もともとは父親が消防分団に入団していたことがきっかけである。父親が入団していなければ興味を持つこと自体なかったかもしれない。父親に「入るか」と誘われ、幼い頃から詰所などにも遊びに行っていたので、入団はしやすい環境だった。

<玉村委員>

やはり、「子どもの頃に何に触れるのか」「何を知るのか」というきっかけが大事だと思う。そのような機会を増やしていくことが大事であると思う。

<城戸委員>

学校は、きちんと子どもたちに地域の取組について教えてくれていると思うが、保護者は違う。子どもが小学校にいるうちは、地藏盆など地域の行事に参加できるよう加入しているが、中学生に上がった途端脱退される方が多い。「おやじの会」は元々消防団から作ったものだが、「おやじの会」に加入するよう誘うと「消防団にも入らないといけない」

と思われ、なかなか加入してくれない。今の親世代の方々に、どのようにインパクトを与えるのが大事なのではないかと感じている。

<玉村委員>

子どもが、親に対してインパクトを与えると効果があるのではないかな。

<城戸委員>

まずは、地域の活動を子どもに見せていくことが大事だと思うが、コロナ禍でここ3年間は活動が止まってしまった。一から立て直す活動もある中で、地域側の不安感もあると思う。

<志藤会長>

多様な方がいるので、なかなか難しいところではあるが、共同体への理解をどう伝えていくのが、コミュニティを維持させてく上で一番重要な課題だと思っている。

森本委員への質問の続きになるが、学生の消防団加入は一般的なのか。

<森本委員>

京都市は学生団員を推奨しており、「大学のまち京都」と言うだけあって、かなり増えてきている。地方から来た学生は、防災に興味をもって加入してくれるケースは多いと思う。

<城戸委員>

卒業したら脱退してしまうのが、残念だ。

<森本委員>

卒業して遠方の地元に帰るために脱退する学生も多い。

<前田副会長>

だが、4年という期限が決まっているから頑張れるという側面もあるのかもしれない。

<森本委員>

今は、ボランティアの単位がもらえる制度もあるので、それを目的に加入している学生もいる。

＜宇野委員＞

消防団に入るのは全部スカウト制なのか。

＜森本委員＞

消防署に入団希望を出される方も、消防団の詰所に来られる方もいるが、地域の団体に所属されている方に声をかけ、入ってもらうことが多い。1つの団体に入ると、様々な団体から加入しないかと声がかかるが、どの団体も人材不足なのだと思う。

＜城戸委員＞

自分の学区では、外国籍の方で消防団に加入してもよいと言ってくれる方もいるが、日本国籍でないと加入できないので、国籍がネックとなっている。入団してもよいと言っている人が入団出来ないのが残念である。

＜宇野委員＞

海外からの旅行者も多い京都では、災害時にこそ外国籍の方が活躍しそうだが。

＜城戸委員＞

京都市は外国籍の方も多いので、そういう方へも門戸を開いてもらえたらと思う。

＜志藤会長＞

本日は3名とも、それぞれの観点から地域の取組を御紹介いただいたが、そもそも京都市の地域コミュニティがこの先どうなっていくのか、どの団体も担い手不足という大きな課題に直面しているので、先の意見でも出ていたが、多様な人たちに声をかけていくという方向性を柔軟に考えていくなど、皆総力戦で知恵を出し合っていかなければいけないのではないかなと思う。

＜沖委員＞

この審議会の会場について、宇野委員のNPO法人が運営する「and happiness.」で開催するなど、地域の拠点である現場で開催していただくのもいいのかもしれない。

＜志藤会長＞

山本委員は長年地域活動に携わられているが、3名の発表を聞き、何か御意見はあるか。

<山本委員>

団体によって、地域活動の内容が様々変わってきている。

社会福祉協議会も法人化した時から比べると、かなり活動も活発になってきようと思うが、上京では窓口が住民福祉協議会 1 つなので、市社協や行政から同じような内容のものが下りてきて混乱するという意見があった。

消防団の話では、上京では子ども消防団を作っている学区がある。もちろん正式な消防活動は出来ないが、消防団の意義を教えている活動なので、そのような取組が参考になればと思う。

祇園新橋の景観まちづくりも、京都という独特の土地で、昔の面影を残したいという想いがある。西陣では、伝統をベースに時代ごとの新たな知恵、技術を取り入れ、「温故知新」ではなく、「温故創新」として取組を進めており、そのような取組を進めていくことが大切であると思う。

<森川氏>

私は市民参加推進フォーラムという市民参加の審議会の座長をしているが、今日の地域コミュニティ推進審議会にゲストスピーカーとして参加させていただき、市民参加推進フォーラムとこちらの審議会の議論する内容は関連が深いように感じた。

お互いの審議会での内容が共有されると、より深まるのではないかと思います。

<事務局>

お互いの審議内容を市民協働推進担当とも共有させていただく。

<志藤会長>

時間の関係上、本日の議題については以上とさせていただく。それでは、事務局に進行をお返しする。

<事務局>

本日も、熱心な御議論をいただき、御礼申し上げます。今後いただいた御意見を踏まえ、今後も取組を進めてまいりたい。

次回、第2回審議会は本年冬頃、基本指針3「多様な主体の連携・協働の推進」をテーマに、委員の方々から話題提供をお願いしたいと考えている。詳細については後日改めて御連絡させていただく。